

<資料展示>

生誕 100 年記念 太宰治『人間失格』自筆草稿

太宰治『人間失格』の草稿

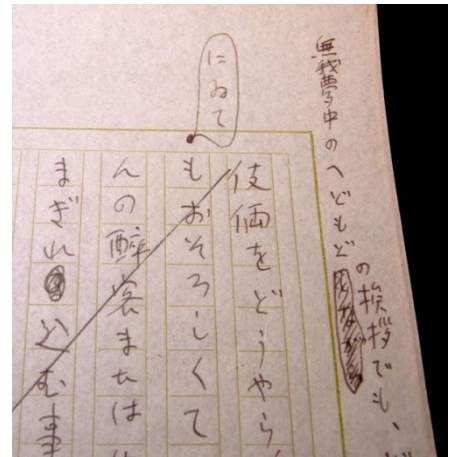
「聖書と日本文化展」(1999年9月29日～10月8日)を立教で開催したとき、太宰治が書いた聖句の書を出品していただいた御縁で、その所蔵者であった故大高正博氏の御家族から、太宰治の原稿二枚(二百字詰)が本学に寄贈された。

二枚の原稿は、いずれも筑摩書房の名入り原稿用紙にペン書きで記載された『人間失格』(1948年『展望』に発表ならびに刊行、筑摩書房)の草稿であることが判明した。また1998年に公開され話題となった大量の草稿にも含まれていないものである(『太宰治全集』13、1999、筑摩書房)。

「159」の番号が付された一枚は「第二の手記」の部分の草稿であるが、全面×印で消されているので草稿の草稿かもしれない。初出および決定稿と比較すると、「技倆を」の後に、「れいの運動で走り廻ったおかげ?または、女の? または、酒? けれども、おもに金銭の不自由のおかげで」の言葉のない点が大きな相違である。

「244」の番号が付された他の一枚は「第三の手記」の部分の草稿であり、やはり同じような比較をすると、「たまらなく侘しい思ひ」の前に「おしるこのはげた塗箸をあつかひながら」がない。そのほか、いくつか表現を改めている。

これらから、『人間失格』の完成稿を作成するにあたり、太宰がレトリックに最後までこまかく神経を使っていた様子がうかがわれる。太宰はこの執筆後まもなく世を去る。



(元コミュニティ福祉学部教授 鈴木範久)



名著初版本複製太宰治文学館／日本近代文学館編集(1992)より